

参考資料 9 土壌型別管理法

土 壌 型		管 理 法
①	黒ボク乾田	腐植、全窒素及び風乾土のアンモニア態窒素生成量が多く、また、塩基置換容量も大きいなど土壌本来の生産力が高い。しかし、可給態りん酸、可給態珪酸、置換性石灰、苦土などの人為的要因に起因する各種の土壌養分量に乏しく、本来の生産力を発揮していない。
②	黒ボク湿田	黒ボク乾田に類似するが、湿田という条件が土壌管理を粗放化しているとみられ、養分状態は極めて不良である。このため、水稻収量は黒ボク乾田に及ばないばかりか冷害を受けやすいなど、透水性付与とともに徹底した養分の富化が必要である。
③	棚田粘質乾田	下層土の物理性、化学性が不良で根群域が狭くなり、養分の吸収範囲が作土に限定されやすい。このことから、耕土深の確保が重要な課題となり、プラウ耕の導入による作土深耕に有機物、土づくり肥料の施用を積極的に行う必要がある。
④	棚田粗粒質・礫質乾田	透水性が大きく養分の流亡、溶脱が著しく、時に、ごま葉枯病が多発する。養分の富化効果の大きい土壌でもある。水稻の初期生育は旺盛であるが地力窒素が低く肥切れとなり、後期に凋落する傾向が強く施肥にも十分注意を要する。
⑤	棚田粘質湿田	作土が浅く、下層の物理性も不良な上に湿田であり、夏期に還元化が進み根系障害の恐れが強く、養分も欠乏しやすいことなどからごま葉枯病や秋落ちとなりやすい。排水促進とともに積極的な土壌管理が必要である。
⑥	平坦・谷間粘質乾田	本県の主要な土壌であり、一般に土壌生産力が高い。透水性は小さく養分の流亡、溶脱も小さい土壌であるが、黒ボク土に次いで保肥力も大きく、多量の土壌養分量を必要とする。しかし、粗粒質乾田よりも土壌養分量が少なく、土壌管理の粗放化が目立っている。地力の高いわりには収量をあげていない土壌といえる。
⑦	平坦・谷間粗粒質乾田	本県の南部に分布する主要な土壌型である。収量限界の低さの主因は地力窒素の低いことにあり、このことをカバーするためには耕土深を確保するとともに有機物の積極的な施用、土づくり肥料の施用に心がけることが必要である。初期生育の過繁茂を迎え後期の凋落をできるだけ少なくする施肥法が必要である。
⑧	平坦・谷間礫質乾田	
⑨	平坦・谷間粘質強湿田	黒ボク湿田と同様に土壌管理の粗放化が懸念される。乾田に比べて可給態リン酸、可給態珪酸、石灰、苦土及び加里含量が少ない。他の土壌型は高収と低収では土壌養分に違いがみられるが、この土壌型には収量と土壌養分とにほとんど関係がみられない。これは、生産阻害要因の還元化の進行による根系障害にあると考えられ、排水対策が先行されねばならない。
⑩	平坦・谷間粗粒質強湿田	
⑪	平坦・谷間粘質半湿田	
⑫	平坦・谷間粗粒質半湿田	